

学位請求論文審査報告要旨

2013年2月13日

申請者 本橋裕美
論文題目 斎宮の文学史

論文審査委員 河添房江
黒石陽子
武村知子

1. 本論文の内容と構成

本論文は、「斎宮の文学史」と題して、上代から中世に至る斎宮が存在した期間について、歴史書や古典文学など、さまざまな文献に顕れた斎宮像を検討した上で、斎宮という存在がどのように表象されたかを体系的にまとめたものである。

斎宮に関わる先行研究は歴史学に牽引されてきたが、それは斎宮という存在が極めて政治的であり、制度や位置づけにその本質があるとされてきたからに他ならない。一方で、物語や和歌等の文学にあらわれた斎宮については、個々の物語分析の文脈の中で取り扱われることは稀でないにせよ、文学的形像としての斎宮を通史的に捉える試みは特段なされてこなかった。本論文では、斎宮を歴史的に捉えようとする際に捨象されがちな文学作品の斎宮像を分析の中心に据えることで、新たな斎宮研究の構築をめざしたものである。

本論文の構成は、三部構成である。第一部では、平安時代以前の様々な文献にあらわれた斎宮像について扱っている。第二部では、『伊勢物語』『源氏物語』『狭衣物語』など、平安以降の主要な物語文学、さらに『海人の刈藻』をはじめとする中世王朝物語における斎宮の描かれ方やその位置づけを明らかにしている。第三部では、古代から中世までの斎宮について、物語文学以外の作品から分析している。特に、斎宮として伊勢に下った皇族女性の残した和歌や、日記をはじめとする実録文学を中心に、平安から中世にかけて文献にあらわれた実在の斎宮たちの文化・文芸活動がどのように文献に描かれたのかを検証することで、歴史と文学を繋ぐ試みを行っている。

本論文の目次を以下に掲げる。

序 本研究の意義／斎宮の研究史
凡例
第一部 上代から平安へ

第一章 史書の齋宮と王権

第一節 創始期の齋宮

第二節 雄略朝以後の齋宮

第三節 『日本書紀』の齋宮と『古事記』の齋宮

第二章 『万葉集』の齋宮

第一節 『万葉集』における齋宮関係和歌

第二節 大伯皇女をめぐって

第三節 天武朝における天照大神と齋宮

第三章 井上内親王の事跡

第一節 聖武朝以前の齋宮制度

第二節 井上内親王の事績

第三節 齋院創始と齋宮の位置づけ

第二部 物語の中の齋宮

第一章 『伊勢物語』『大和物語』の齋宮

第一節 『伊勢物語』狩の使章段と日本武尊

第二節 『大和物語』の齋宮たち

第三節 「親心の闇」歌小考

第二章 『源氏物語』の齋宮

第一節 「別れ路に添へし小櫛」が繋ぐもの

第二節 絵合巻の政治力学

第三節 『源氏物語』における春秋優劣論の展開

第四節 冷泉朝中宮の二面性

第五節 冷泉朝の終焉

第六節 「神さぶ」櫛のゆくえ

第七節 六条御息所と秋好中宮における母娘の論理

第二章の終わりに

第三章 『狭衣物語』の齋宮

第一節 堀川の上の物語をめぐって

第二節 『狭衣物語』の〈齋王〉

第三節 齋宮託宣事件と『狭衣物語』

第四章 中世王朝物語における齋宮

第一節 『海人の刈藻』における姉妹の論理と皇女たち

第二節 『浅茅が露』の始発部をめぐって

第三節 『我が身にたどる姫君』の前齋宮

第四節 『恋路ゆかしき大将』における齋宮

まとめ 一物語における齋宮一

第三部 歴史の中の齋宮

第一章 齋宮による文学

第一節 徽子女王について

第二節 規子内親王の事績

第三節 齋宮による文学概観

第二章 歴史物語・日記の中の齋宮

第一節 歴史物語における齋宮

第二節 『更級日記』の天照御神信仰

おわりに—齋宮の文学史に向けて／今後の展望

補論一 平安の櫛と扇をめぐる

補論二 『源氏物語』の後妃と儀礼

補論三 沈黙の向こうに広がる〈記憶〉

初出一覧

資料編

2. 本論文の概要

本論文は、第一部の「上代から平安へ」、第二部の「物語の中の齋宮」、第三部の「歴史の中の齋宮」という三部構成から成っている。

序では、筆者の立場とその意義、そして齋宮の研究史と問題点に言及している。

第一部は、齋宮が制度として始発する時期の齋宮像について論じたもので、対象となるのは、『日本書紀』や『古事記』で語られる初期の齋宮たちから、平安初期、齋院が創始される時期までである。

第一章は、天武朝以前の齋宮について、『日本書紀』の記述を中心に考察している。豊鍬入姫、倭姫命、五百野皇女の三名の齋宮が作り出した「父天皇と娘齋宮」という最も安定した組み合わせの制度が、後の雄略朝をはじめ、密通事件を起こす齋宮を描く時代の中でどのように位置づけられているかを検討している。『日本書紀』『古事記』の間にある齋宮への関心の差異についても触れている。

第二章は、齋宮を文学として描いた最初の作品といえる『万葉集』を中心に、天武朝の齋宮大伯皇女や、天照大神祭祀について論じている。天武天皇が作り上げた齋宮を利用し

た祭祀形態が、持統朝にそのまま引き継がれることで、かえって変容してしまうことを指摘し、いまだ不安定な齋宮制度や天照大神祭祀について確認している。また本章では、天武朝以後の政治状況の中で『古事記』や『日本書紀』の言説が作られたことを確認した上で、この視点から齋宮制度を改めて捉え返している。

第三章では、天武・持統朝以後の齋宮制度を『続日本紀』などを通じて見直している。文武天皇や聖武天皇といった即位が期待される皇子を擁した時に、齋宮制度や天照大神祭祀が改めて要請され、時に制度を歪ませても、最良の形で祭祀がなされてきたことを確認している。また、歴代の齋宮の中でもっとも劇的な人生を送った井上内親王の事跡を辿り、彼女の存在が後世に与えた影響をまとめている。後代から井上内親王を捉えた『水鏡』も対象とし、井上内親王に対して後代の人が多くを語らずにいたという事実が持ちうる意味にも触れている。

第二部は、『源氏物語』『狭衣物語』を中心とした、平安王朝物語から中世王朝物語までの齋宮像の分析で、四章構成になっている。

第一章は『伊勢物語』『大和物語』など歌物語を中心に、前期物語に点描された齋宮を扱っている。第一節で扱った『伊勢物語』狩の使章段は、『齋宮の文学史』にとって重要な位置にあることを論じている。奈良と平安の文学の間には断絶があり、第一部で論じた『日本書紀』の問題などはそのまま平安の物語に適用できないことが多いものの、『伊勢物語』の狩の使章段は、古代のヤマトタケルに繋がる回路を有していることを分析している。『日本書紀』や『古事記』で語られる伝説が、『伊勢物語』の中から浮かび上がる構成になっており、そこに齋宮が持つ古代的な祭祀形態との連続を論じている。

第二章では、『源氏物語』の秋好中宮について詳細に論じている。方法としては『源氏物語』の人物論として、さまざまな観点から秋好中宮を取り巻く物語を明らかにした上で、改めて『齋宮の文学史』におけるその位置づけについて考察している。具体的には、齋宮という経歴、両親の無念、子のない立后という矛盾を整理した上で、その政治的な役割を論じている。

第三章では、『狭衣物語』の齋宮像を分析している。『狭衣物語』は二人の齋宮を描いていて、一人が狭衣の母堀川の上、もう一人は嵯峨院女三の宮である。堀川の上については、齋宮の貴種流離譚と捉える説を継承して、伊勢と京を往還する齋宮の移動の問題を明らかにしている。嵯峨院の女三の宮については、在任中の齋宮が描かれるという珍しさに加えて、託宣という他に例を見ない齋宮像が語られることに注目する。第三節では、『狭衣物語』の成立の背景として、現実世界で託宣を下した嬪子女王の影響力を論じている。『狭衣物語』という優れた物語と、実際に起きた託宣事件が相互に作用して、『齋宮の文学史』が新たな局面を見せることを論じている。

第四章では、『源氏物語』『狭衣物語』ほど研究が進展していない中世王朝物語における齋宮群像を扱っている。『海人の刈藻』『浅茅が露』『我が身にたどる姫君』『恋路ゆかしき

大将』について、それぞれの齋宮像に注目して、中世王朝物語に特徴的な皇女の問題や『源氏物語』引用を考察している。合わせて、齋宮が卜定されなくなる鎌倉末期を見据えて、廃絶する齋宮が物語でどう位置づけられるかを論じている。さらに「まとめ—物語における齋宮—」で、齋宮と物語文学全般の関係について、主に王権との関わりから総括している。

第三部は、第一部や第二部で扱うことのできなかつた歴史上の齋宮を論じている。

第一章では、『齋宮の文学史』にとって重要な存在である徽子女王と娘の規子内親王、最末期の齋宮である後醍醐天皇の皇女たちとその和歌について分析している。

第二章では、歴史物語と日記文学の齋宮について考察している。『大鏡』『栄花物語』など歴史物語は密通事件を好んで語るものの、実は許される密通事件だけをセレクトして語っていることを明らかにしている。また日記文学の『とはずがたり』など、齋宮制度が形骸化した時代の齋宮像についても分析している。さらに天照神信仰の面ではしばしば言及される『更級日記』についても、語りの方と合わせて論じている。

「おわりに」では、『齋宮の文学史』において各々の人物がどのように意味づけられるかを簡潔に示し、今後の課題を述べている。

補論として、齋宮研究そのものではないが、関連のある内容を扱った三つの論文を収載している。平安時代の櫛と扇、后妃と儀礼の関係、末摘花の沈黙についての考察である。さらに資料編として、「齋宮の文学史表」「物語齋宮一覧表」「齋宮関係系図」「歴史上の天皇・齋宮・西院簡易一覧表」を付けている。

3. 本論文の成果と問題点

本論文の成果についてであるが、総論としていえば、**第一**に、本論文が歴史・文学双方に立ち現われる齋宮群像から、齋宮という制度・文化およびその圏域を通史的かつ広域的に一望しうる視点を提供しようとする、おそらく研究史上はじめての試みである点が挙げられる。包括的な齋宮像通史の、広大な展開の可能性を孕んだ試みとして、本論文が持つ価値が絶大なものであることは疑いない。

以下、各論の成果に移ると、**第二**に井上内親王の存在の特異性を分析し、後代の齋宮経験者を考察する際にもキーパーソンである点を指摘したことが評価される。井上内親王は、齋宮イメージの形成という点で極めて重要な人物であり、齋宮経験者が退下した後いかに生きるかという問題が井上内親王によって喚起されたという指摘は貴重である。

第三に、『伊勢物語』や『源氏物語』など、先行研究の蓄積もあり独自な見解を打ち出すことが難しい物語文学について、十分な新見を含んだ論述を展開している点が挙げられる。『伊勢物語』については、齋宮が登場する狩の使章段に注目し、古代のヤマトタケルの物語に繋がることを指摘しているが、そこに齋宮がかかわる古代的な祭祀形態との連続を論じて、「齋宮と王権と密通」という歴史学的にも文学的にも重要と思われるテーマを掘り

下げうる可能性を呈示していることは興味深い。

また特に『源氏物語』の秋好中宮についての諸論は、齋宮という前歴や、両親の果たせなかった栄華を実現した点など、その経歴に歴史上の人物を重ねつつ、そこから離陸する物語の想像力を丁寧に読み解いた内容で、本論文の圧巻というべき部分である。

第四に、平安後期物語の代表作である『狭衣物語』について、狭衣を帝位につける齋宮の託宣と歴史上の託宣事件との連鎖を論じ、流離しながらも帰還して影響力をもつ齋宮のイメージを浮き彫りにし、中世王朝物語の『我が身にたどる姫君』を呼び起こす契機となることを提示した点が評価できる。

第五は、ほとんど注釈も先行研究もない中世王朝物語の『海人の刈藻』『浅茅が露』『我が身にたどる姫君』『恋路ゆかしき大将』について、齋宮を中心として意欲的に論じた点である。特に『我が身にたどる姫君』論においては、齋宮を女帝と対比することで、中世という時代における齋宮像の極北を見出した点は興味深い。本橋氏はこの齋宮像を《齋宮の文学史》における一つの到達点であると結論づけている。中世王朝物語の齋宮像に注目することで、新たな作品評価を示したことは、今後の中世王朝物語研究にも大きく寄与すると考えられる。

最後に全体として、古典文学が史実をさまざまな形で摂取し、展開の原動力としている点への分析はもとより、文学に描かれた事件が逆に歴史を変えていく、あるいは後代に再解釈されて新たな齋宮像を形成していくという逆のプロセスについても考察を及ぼしている点が高く評価できよう。

このように優れた面を備えた本論文であるが、問題点もいくつか存在する。

第一に、種々の文献資料を歴史書として扱うか、文学として扱うかに関する態度が不明であるため、特に第一部および第三部において、《齋宮の文学史》というタイトルをもって本論文が意図する方向性がやや不明瞭になる嫌いがある。この態度の揺れは、資料本文を扱う際の処理のしかたの部分的な不徹底にも反映している。同じ文学でも、歴史物語と作り物語を同じ位相で扱ってよいのかという点に関しても、若干慎重さに欠けるようである。

第二に、古典文学の先行研究のみならず、歴史学をはじめ隣接科学を含めた先行研究を意識し、十分敬意を払って考察を進めているが、逆にそれらを批判する言説は少なく、先行研究との差異が見えにくい部分がある。特に歴史的考察においては、個々の立論でどの先行研究なり文献なりに依拠しているのかがわかりにくく、結果的に自説の立ち上げが弱くなる箇所が見られる。

第三に、歴史上の齋宮について、特に中世に関する考察がやや不十分な点や、和歌や漢文日記、神道関係の文献など、あまり扱っていないことが課題として残っている。

第四に、各論において導きだされた興味深い諸論点を、全体として目差されている齋宮通史の中に位置づける作業がやや不十分である。各論において見られる精緻さが、総論に

において相対的に欠けている点が惜しまれる。

しかし、こうした問題点は、本論文がもたらした学術的成果の価値を抜本的に損なうものではない。特に、個々の各論に見られる独自の着眼点と論旨が今後の当該分野の研究にもたらすであろう可能性は甚だ大きく、上記の諸欠点はこの長所に照らして見たときに相対的に浮かび上がるものにすぎない。また個々の問題点については、本橋氏にも十分な自覚があり、口述審査時の適切な応答に鑑みて、今後の研鑽によって十全に克服されることが期待される。

4. 結論

以上のことから、本論文が学位論文に値する優れた研究であることを認め、本橋裕美氏に一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考えます。

最終審査結果の要旨

論文審査委員 河添房江
黒石陽子
武村知子

2013年1月31日、学位請求論文提出者、本橋裕美氏の論文『齋宮の文学史』に関する疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのに対し、本橋氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって、本橋氏が学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有すると認定し、最終試験において合格と判定した。